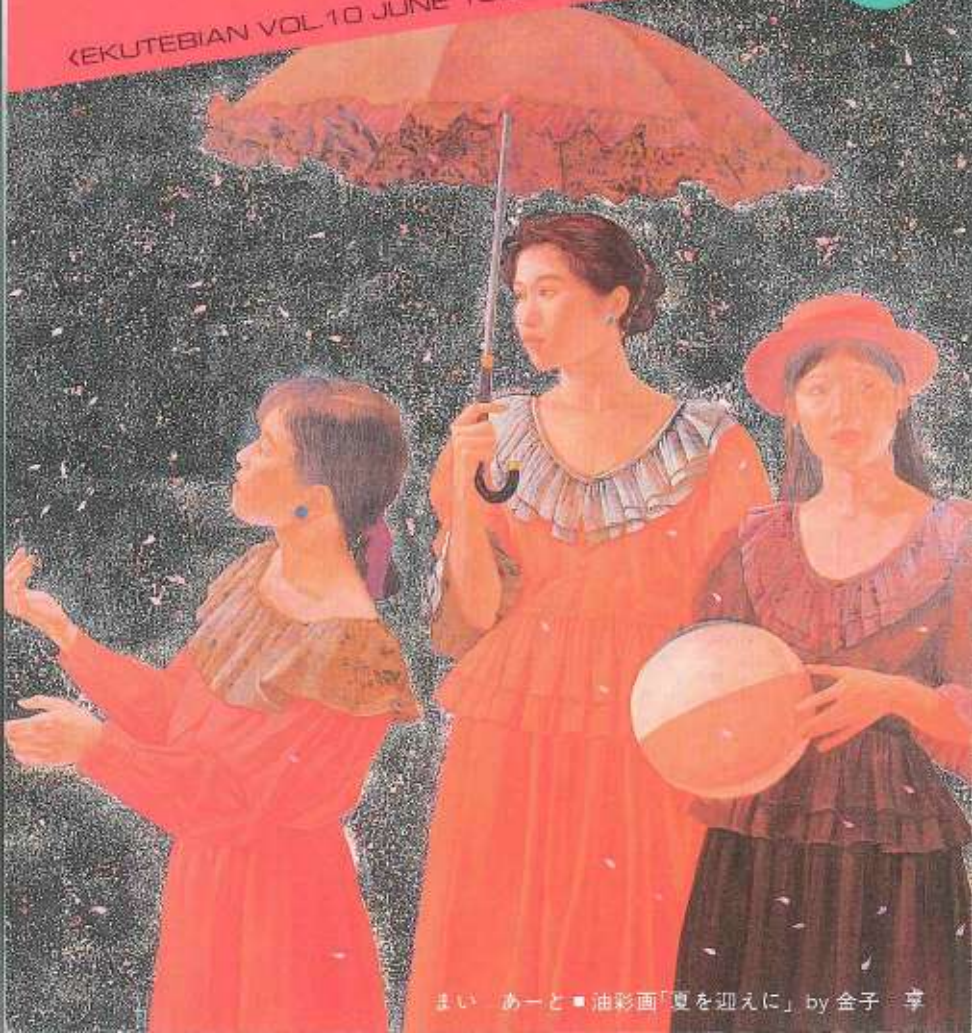
月刊
立川と語ろう　立川に生きよう
えくてびあん
6
〈EKUTEBIAN VOL.10 JUNE 1992-EKUTEBIAN〉
まい　あーと■油彩画「夏を迎えに」by 金子　享

第二回・頌の会

文学を聴く

清水たみ子さん（若葉町）と森忠明さん（曙町）の二人が児童文学の世界で大賞を獲得した。これは「ベスト立川人・展」などですでに報道してきたが、今度は『頌の会』で作品そのものを賞味しようという試み。発起人に河林満さん（作家・一番町）、きどのりこさん（児童文学者・若葉町）ら文学ゆかりの人たちが立ち、この日会場にはさながら「文学サロン」の空気が流れていた。また清水作品には当会オリジナルの曲で、ライブハウスの雰囲気も（於メヌエットサロン／朗読・小林恭治）

弾むように時には静かに、澄んだ声で詩情ゆたかな歌唱は童謡歌手の拝田祥子さん。▼

ぜひ俺達にも、と、清水作品に曲をつけ、演奏披露する学生は山田若五郎君&小岩稚美君。▼

円熟した朗読技法で、こころに語りかけてくる小林恭治さん。▶

▲森 忠明さん（左）と清水たみ子さん（右）お二人並んで会話も弾む。

森 忠明作『ホーン岬にて』（野間児童文芸賞）　清水たみ子作「かたつむりの詩」（赤い鳥文学賞）

小林恭治さん（左）・森 忠明さん（中央）元NHKディレクター武田照子さん（右）◀

▼左から発起人の河林満さん（作家）・きどのりこさん（児童文学者）・鈴木茂夫さん（元TBSプロデューサー）

▼清水作品を得て、作曲できた喜びを語る作曲家、渡辺博史さん。

▼伴奏を引き受けてくれた国立音大の拝田正機先生。

ルーペの人生

6月10日・時の記念日

夏らしくなってきたこの6月。10日はみなさんも知っての通り〜時の記念日〜です。それにちなんで、ルーペ一つで、百年前に行ったり来たり、移ろいゆく時代の風合を見せては、壊れた思い思いの時計を確かに治して楽しむことの一つを届けてくれる人と出会いました。

●偶然見つけた、魔法の珠

羽衣町は、羽衣中央会館向いのバス通りに見えるのは、時計骨董をやっている、小薗井時計店。繁華街からは離れていますが、よくマニアらしき若者が、凝らし眼でウインドウを覗いています。

よく見れば、ただの時計屋ではないとわかる。ウインドウに並んでいたのは1907年、スイス製ヴァセロン・コンスタンチン。一世紀前の貴婦人が愛用した18Kの懐中時計。戦時中、破損防止の為の珍しいダブルカプセル製のウオッチもあり、蓋をあければ、懐中時計としても使えるように出来ている。また、西暦、月日、曜日が、外側から内側に向かい、いくつもの大中小のダイヤル式で表示される五十年前のロレックス製ウオッチなどを見ていると、タイムマシンで、生まれていなかった時代へと向かうボタンを押してしまったような感覚になる。この「時の夢想旅行」の操縦士は、小薗井種義さん、七十八歳。十六の時からこの道にというから、既に62年間、あの時計屋独特のルーペ、きずみを右目にはめては、時計の針と共に生きてきたことになる。

▲昔懐かしのままのボンボン時計などが並ぶ

▲ロレックス・バブルブックをはじめ時代を感じる腕時計の数々

▲スイス製ヴァセロン・コンスタンチンをはじめ時代を感じる懐中時計の数々

▲一週間巻の12インチの丸時計（中央）と二週間巻のドイツのユーハンス（右）

▲リペアデスクに座る小薗井さん

▲ＰＸ（基地内のストアー）で時計修理をしていた当時のままのリペアデスク。通常のものより引出しが細かく多い。

●残された時計のやすらぎ

遠く都内からも修理を頼まれることも多い小薗井さん。「儲からないのに馬鹿だなあとよく言われるんだが、でも、誰にもできないことだから好きでやってるんだよ」と言う。店の装飾からして、全く媚びてない。しかし、今、どこの店にもない空気、を自然に伝えて、マニアを却って引き付けてしまうのは、小薗井さんの生き方そのものなのかもしれない。下町の小僧時代、立川基地内で外人相手に時計修理をしていた時代、そして、立川羽衣町に店を構えた時代。外国の時計も自由に治せるのはこんな経験からのことだろう。30年前のAichiの丸時計、40年前、戦時中のMeijiの柱時計、60年前のスイスのリピーターと、たいていのものは何でも治してしまう。効率が悪いからいらないと言っていたら、こんな能力もきっと消えていってしまうのだろう。この消えていこうとしているものが、残されて確かにある。それが今にない心のゆとりとやすらぎを与えてくれているような気がして店を後にした。

（町田健一）

立川市社会福祉協議会会長、東京都老人クラブ連合会会長などの要職にあられました小川良さんが五月七日、急性じん不全のため逝去されました。

小川良さんは昭和三六年に全国初の女性市議会議長として重責をはたされその後も終始、立川発展の基として寄与された方でございました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

立川クイズ

先月は市内に6つもある駅の開業の順番をおたずねしましたが、最古参がJR立川駅（明治22年）、ついで西国立駅（昭和4年）、西立川駅（昭和5年）、西武線の玉川上水駅（昭和25年）、西武立川駅（昭和43年）、武蔵砂川駅（昭和58年）となります。まちの発展の歴史を物語るかのような駅の誕生です。

さて、まちの歴史といえば来年は立川にとってたいへん意義深い年です。明治26年に三多摩が神奈川県から東京府となってちょうど百年になるのです。その帰属が複雑に移り変った三多摩がようやく神奈川県に落ち着くことしばし、なぜまた移管を？その主な理由は一体、何だったのでしょうか。①住民投票で大半の住民がそう望んだ②玉川上水管理の一本化③首府東京の府域を拡張するため。

ことわざ問答㉖

漢字一字挿入せよ

牛の角を□が刺す

□めるなら若木のうち

立川トピックス

矢川をクリーン〜立川自然観察友の会〜

羽衣町は三丁目立川病院の先を多摩川の方へ降りると、立川にただ一つ残る湧水の川「矢川」が見える。

ここは、立川段丘崖から湧き出す水を水源とする小川で水辺を中心に多くの動植物が見られることから東京都の緑地保全地域に指定されているが最近では汚れが目だっていた。ここに注目した立川自然観察友の会が4月12日（日）9時から11時半まで観察を深めながらゴミ拾い・除草を行うと見違えるような絵になる矢川に戻っていた。お散歩の際、ちょっと足を伸ばしてみてはいかがでしょうか。

楽しみながら学習できる〜立川防災館〜

4月26日（日）昭和記念公園立川口先、消防署の隣（泉町）に立川防災館がオープンした。体験学習などで都民の防火・防災意識を高めようと東京消防庁が建設。防災教育センターとしては、池袋防災館に次ぐ二館目。立川防災館では効率的に防災教育を高めるのに実体験できるようになっていて訓練とは言いながら地震体験室、煙体験室など充実した施設と係員の丁寧な指導により、つい訓練の手に汗ばむ場面も。緊張の中からリアルに体得できるようなシステムになっている。

表紙は語る

まい・あーと　油彩画　夏を迎えに　by 金子 享

今回の作品は今年2月5日〜12日まで駅ビル・ウィルホールにて開催されたWILL50人展での出品作からです。この作品「夏を迎えに」は、春から夏にかけて、人物と季節の関わりを表現したもの。油彩画とテンペラ画（卵の黄身と白身でつやけしの感じが出る）の併用で一層明るい方に色の彩りが見えます。作者の金子享さんは、油彩画を描き続けて25年。人物をテーマに一貫。好きな作家はイタリア・ルネッサンス期のボッティチェルリとピエロ・デルラ・フランチエスカ。一見日本画風でありながら、どこか、イタリア的ルネッサンスを感じさせる風合はそんなところからのものなのかもしれない。芸大の油絵科を卒業後、現在は東京学芸大学美術科の助教授として学生に絵を教えている。絵は教えようとしてもなかなか教えられず、自分が一生懸命やることで、自然に伝われば と本来の教師としての姿勢も持ち合せている。生徒が羨ましい…。

真如苑だより

長雨の季節ですので、つい、こころの中も湿りがちですが、カラッとした気分で過ごしたいこの頃です。今月も真如苑では皆さま方を、照っても降っても、お迎えする用意を整えております。すがすがしい「夏」への準備だと思し召して、皆さまお揃いでお出掛けください。

■日時　6月15日(月)　3時〜5時

■御本尊、真如宝物館をはじめとして映画など盛りだくさんの用意がしてございます。

■お申し込みは「えくてびあん・コンパニオン」（本誌を手渡してくれた人）へ。

東風

清水たみ子さんの詩集と、森忠明さんの少年小説の朗読を聴く機会を『頌の会』で得た。朗読者に小林恭治さんという一流の方をお迎えできて、清水文学、森文学の入り口くらいは垣間見たように思う◆はじめての経験なので、不安はいろいろあったが、一番の心配は会場の空気がある緊張を最後まで保ちうるかということであった。朗読を聴くということは、読み手も大変だが、聴き手もそれ以上に集中力を要することは、数年前に当工房でヘミングウエイの『武器よさらば』の朗読をテープにして出版社が刊行するお手伝いをしたことでわかった。シナリオは当方が担当したにもかかわらず、縮約版の『武器よさらば』を一気に聴き通すことは、工房の誰もが出来なかった。もっとも、上下巻3時間は厳しいマラソンレースだ◆今回の『頌の会』は全部で2時間、その間、お茶の時間を挟んでテンションを和らげたのはアタリであった。それに、音楽同様「ライヴ」という鮮度が随分、助けてくれた。カセットテープという「缶詰め」ではなく、シェフが目の前で料理してくれる感動とでも云おうか◆会が終ってみると、参加者の顔色にこころなしか赤味がさしていたように思えた。作者と作品を共にした爽快な気分に満ちていた。会場から外へでると、爽やかな春風の立川の夕景が待っていた◆六月や 峯に雲置く　えくてびあん

（編集）小川知子　隅川理　中村絵里　原田悦子　半沢正弘　町田健一　山田恵子
（写真）天野武男　板橋一明　井上義治　スタジオ269　枝川一巳　本多修

月刊えくてびあん　第95号
平成四年六月一日発行
発行所　えくてびあん編集工房
東京都立川市柴崎町1-3-37-303
磐城ビル3F　〒190
電話　〇四二五(28)〇〇八二
FAX　〇四二五(28)一二九七
編集人　立井啓介
発行人　沖野嘉男
印刷所　㈱大廣社

ことわざ問答 答

牛の角を蜂が刺す

痛痒を少しも感じないこと。蛙の面に水。あるいは釣鐘を蜂が刺す。石地蔵に蜂など同義。

矯めるなら若木のうち

幼少の時に悪いクセを厳しく矯正しておかないと成長してからでは難しい。老木は曲らない。

山本夏樹さん
（富士見町5丁目）
愛機→ニコンF4
■飛翔（ヤマセミ）

松岡孝一さん
（富士見町5丁目）
愛機→ニコンF3
■尾瀬の水